

「記述description」と「叙述narration」の区別はフランス式の教育ではそれはやかましく掛けられ、文芸批評理論のなかでも大手を振ってまかり通っている。スペドゥラナ・アルバースがThe Art of Describingで着目したのもこのパラダイムだ。オランダ絵画に見られる執拗なる現実記述は、イタリア式物語叙述絵画のカノンに対する意識的・反定立であった。そもそもクローデルも言うように、土地の大半が水面下で、地平線の上に空かたならしく広がるだけのオランダ風景は、イタリア式の透視図法による建築的・舞台的構築法では描ききれない。クイブもホッペマも、ラテン的規範からの逸脱ぶりによって、1ランク低級な作物と否定的に評価されるしかなかった。

——だが、とアルバース、商業の中心地の座を獲得しつつあった当時のオランダ都市において模索されていたのは、演劇的な物語叙述ではない別種の絵画の可能性なのだ。それは世界各地の港の景観図や地形図、海図、さらに百科事典の挿絵



規範への不忠実さに忠実であること
『描写の芸術』における翻訳記述について

三又大千・フランシス・メキ
和賀繁美
Inaga Shigemitsu

の技法と同根だ。なぜなら絵画の複製版画を製作するその同じアトリエが、地形図などを印刷する銅版画工房でもあったのだから。両者無関係と見るのは現代人のさかしらで、当時両者は未分化なればこそ共通の「記述」パラダイムに乗っていた。フェルメールの「画家のアトリエ」の背景の地図も、この文脈で読み解くべき寓意なのだ。

——否そんな話は眉唾だ、だいいち彼女は自分に都合のよい資料ばかり利用して、原文オランダ語を歪めて翻訳している、とお冠はお株を奪われた本國の植根筋。美術作品という枠をあらかじめ設定して議論を立てるのも困りものだが、逆に絵画生産を当時の文化事業一般の文脈に解き放ち、そこに通底する記述原理を想定しようとするアルバースの視点も、慎重な「美術史」記述の掟では最初から立証不可能で飛躍だらけ、日本語訳『描写の芸術』はその板挟みに陥まって喘ぐ貧血な症例だ。

*S. アルバース『描写の芸術』幸福輝訳、ありな書房1994。